

企画者のことば

「医療崩壊」という言葉が世間に浸透し始めてからすでに10年以上になるのではないだろうか。産婦人科領域で最も医療崩壊という言葉象徴するもの、そして、大きな転機になったのは大野病院事件であることは論を俟たない。この事件の報道などを通じて我々産婦人科医が知ったのは、産婦人科医療に対する世間の認識とのギャップであった。また、裁判の判決では、科学的な根拠ではなく、裁判官が考える社会通念が重要であることを知った。

このような社会背景をもとにガイドラインの必要性が認識され、日本産科婦人科学会によって産婦人科診療ガイドラインは作成され、今では若い医師たちの教科書のような存在として用いられている。ガイドラインの存在により、これに従って診療をすすめておけば自分たちは守られる、そんな安心感を持って医療ができる時代になったのである。自分の若いころにこういうものがあればよかったな、そう思うと同時に、若い医師たちを見ていて、一種の違和感を覚えるときがあるのも事実である。

その違和感とは何か？ 今の若い医師たちが優秀であることは間違いなく、意欲にあふれている人たちばかりである。ガイドラインはほぼ丸暗記しているのではないか、と思うような者さえいる。しかし、ときにガイドラインでは対応できない症例に対した際に、「とりあえずガイドラインから逸脱したことはしていないからそれでいい」、言葉には出さないが、そんな表情が読み取れることがたまにあるのだ。

もちろんわれわれ医療者も生活があり、自分を法的に守る努力はすべきである。だが、ガイドラインのみで多様性にあふれる症例すべての問題に対応できるわけでない。ガイドラインから一歩踏み出す勇気がわれわれには求められているのではないか。漠然とそういう思いを抱いていた。そんなある日、ドラマで弁護士が次のようなセリフを言った。「この分厚い六法全書も実はすき間だらけ。そのすき間を埋めるのが弁護士の仕事なんですよ。」まさにこのことである。われわれ医師はガイドラインのすき間を埋めることが仕事なのである。しかし、そのすき間を埋めることは容易なことではない。ベテランの各々の分野のマエストロともいべき人だけが知っている、臨床の技、それを若い医師に伝えることが、彼らをさらに成長させ、医療のレベルアップに役立つに違いない。このような背景から本特集の企画をすることになった。本特集を読んだ若い医師たちのなかから次世代のマエストロが現れるものと信じている。

* 診療ガイドラインは、CQ (clinical question) ですが、本特集はGQ(gap question)の方が適していると思われますので、GQとしてありますことをご了解下さい。

杉本公平，岡本愛光